

主体的な読み手の育成 ～自分の言葉で「語る」ためのトレーニングを通して～

藤原一恵

鳥取大学附属中学校 国語科

E-mail: fujiwara_kz@tottori-u.ac.jp

FUJIWARA Kazue(Tottori University Junior High School): **Nurturing students who can read independently.～ Through training to "speak" in one's own words. ～**

要旨 — 様々な課題に直面し立ち向かうために、物事に対して問いを立て試行錯誤していくことが必要である。読み取ったことを「語る」学習を通して、生徒自身が問いを立てて作品の主題を読み取ることに取り組んだ。その成果と課題を報告する。

キーワード — プロット, シンポジウム, 「語る」こと, 自己調整力

Abstract — In order to face and confront various issues, it is necessary to ask questions and go through trial and error. Through learning to "speak" what they have read, the students themselves asked questions and worked on reading the theme of the work. Report on the results and challenges.

Key words — Plot, symposium, communicating in your own words, self-regulation

1. はじめに

1.1. 教科としての課題

2021 年度から全面実施されている学習指導要領では、「子供たちがさまざまな変化に積極的に向き合い、他者と協同して課題を解決していくことや、様々な情報を見極め知識の概念的な理解を実現し情報を再構成するなどして新たな価値につなげていくこと、複雑な状況変化の中で目的を再構築することができるようにすること」が求められている。それらは「主体的・対話的で深い学び」の実現によって図っていくことが示されている。

子ども達には、大きな変化が起これば、予想のつかない社会の中で生き抜き、平和な未来を託されている。だからこそ何事に対しても主体的に考え、行動できる力や、多様な見方や考え方をし、よりよい選択をする力が必要である。また、そこには、自分の考えを自分の言葉で「語る」ことが必要になる。そのためにも主体的に学ぶ姿勢や多種多様な見方・考え方に触れる学習活動が必要である。

その中で、国語学習は重要な役目を担っている。「こうありたい、こうなりたい」といった、自分が思い描く幸せな人生を送るために、自分で考えて判断する力と、言葉を正確に受け止め発信する力を身につけていく必要があると考えているからである。

1.2. これまでの研究の成果と課題

これまでも主体的な学習者の育成に取り組んできた。その成果と課題点を次に示す。

(1) 成果

- ・多角的な視点を持って作品を読むことができるようになった。
- ・話し合いや発表を聞くことで、自分の考えと他の考えを比較し、自己調整を図りながら新しい考えをまとめることができた。

(2) 課題

- ・与えられた課題に取り組む意欲は大変高いものがあるが、自ら問いを立てることが出来ない。
- ・作品の主題や作者の主張を自分自身に当てはめて考えることが出来ない。つまり、抽象的な概念を自分という具体的な対象に置き換えて考えられない。

2. 研究の目的

プロットを立てて読み取ることで、登場人物の人物や物語の背景を捉える力を養う。また、グループや学級で話し合ったり、自分の考えを書いたりすることを通して言葉の力をつける。

3. 研究の内容

3.1 生徒の実態と教師の関わり

本学年は入学時から担当している学年である。「よりよい言葉の練習の時間にしよう」という授業者の話を受けて、「苦手だけど自分の言葉で書こう」

「短くまとめるのは苦手だけど頑張ってみよう」という前向きな取り組みの姿が増え、表現力が向上していると感じられるようになった。特に昨年度後半から、生徒会や各委員会・部活動・各行事の実行委員会・学級活動のリーダーとして活躍し、大勢の前で指示を出したり自分の考えを話したりする場面が増え、大変頼もしくなった姿をとてうれしく感じている。

その生徒たちと3年目を迎えた。マスクを外して会話を楽しめる場面も増えてきた。互いの笑顔を見ながらの運動会はとても楽しそうであった。その姿を見ると、自粛生活で奪われてきたコミュニケーションの機会を取り戻し、自分の言葉で伝える喜びを味わわせたいと思った。

また、「自分の言葉で自分の考えを語れる」ようになって卒業させたいとも思っている。どんな場所でも誰といっても、自分の考えたことを自分の言葉で適切に伝え、未来を切り拓いて欲しい。そこで形式的な発表ではなく、「語る」という伝え方を学ぶことを目標に取り組んだ。

3.2 具体的な取り組み

(1) 単元学習: 自分の言葉で伝えよう

～「語る」ためのトレーニング～

語るとは「聞き手に対して、ある程度まとまった内容・説明・事情などを聞かせること」を意味している言葉。語ることによって、目的や意図を持って、相手に何かを伝えることができる。「語ることは、話すこととは異なりまとまった内容を順序立てて話して聞かせること」を指す。

本単元は今後の学習の中で成果が発揮できるようになるための、初期段階の学習として設定した。そのため、生徒も「語る」と「話す」の違いを考えながら、そこに近づくために必要なことについて、この単元を通して学べるように計画した。

そして、義務教育の最後の年、世に出て行くこともできる年齢になるのだと考えると、入学当時から共に過ごしてきた中で感じていた「当たり前にあるものごと」に、身近な人の関わりや思いがあることに気付かせたいという思いが強くなった。沢山の人の支えられて生きていること、一日が平穏に過ごせていることの「当たり前」の素晴らしさに気付く視点を養いたい。それを、国語教材を多角的に多様

な視点で読み取ることを通してできないかと考え、本単元を設定した。

さらに、日々の生活の何気ない人との関わりにも喜びや感謝の気持ちを持って過ごして欲しいという思いもコロナ禍で募っていた。だから、「愛が感じられる言葉」にこだわり、「与えられたもの＝教科書」からそれを見つけて紹介するという言語活動に取り組んだ。

表1 「自分の言葉で伝えよう」学習過程

	学習活動
1	単元の目標と学習過程の確認 ・教科書の中から「愛が感じられる言葉」を探し、それを紹介する活動を行うことの見通しを持つ。 ・原稿を準備して読み上げるのではなく、自分が感じ取った愛を伝えるために語ることを目指す。
2	「愛」とは？ ・「愛情」とは、何かとか誰かを特別に大切に思う気持ちだとすると、どんな愛情があるのかを考え、読み取りの手がかりとする。
3	教科書から「愛が感じられる言葉」を探す ・様々な作品の中から紹介したい言葉の一つを決める。
4	「愛が感じられる言葉」を紹介する準備 ・グループのメンバーに選んだ言葉を紹介し、アドバイスをもらう。それをもとに、「語る」内容を吟味する。
5	「愛が感じられる言葉」を紹介する ・他のグループで読み取った愛情についての思いを語る。友達の「語り」についてコメントを返す。
6	学習のまとめ ・思いを伝えるためには、より具体的な事柄を例に挙げたり、他の人が気づかない魅力を伝えたりするなどの工夫が必要。

「語る」というのは、それについての思いの強さを誰もが知っていることではない意外性のある内容等を具体的に紹介することで、聞き手を引き込んでいく効果があるという感想が多く見られた。それらをこれからの学習に取り入れていくことが必要だと気づくことができた。

また、教科書に限定したことによって紹介される作品についてのイメージを持って聞くことが可能となり、コメントもしやすかったようだ。

(2) プロットを立てて読む

～作者が作品を通して伝えたいことを捉えよう～

その1「百科事典少女」小川洋子

その2「故郷」鲁迅

物語を読み取る学習では、教師の発問につい

て読み取っていくことで主題に近づいていくことが多かった。しかし、自らがストーリーにプロットを立て、それについて深く考えていくことが最終的に身に付けたい「読む力」である。そこで、二つの作品を主体的に読む学習に取り組んだ。

どちらも、作品について皆で考えたい疑問点を挙げて、それを二つに絞り込み、各グループでそれについての考えを述べることを行った。

作品を深く読むことに効果的な疑問についても吟味する必要があったため、二つの作品について同じ学習を行った。ただし、「故郷」については、皆で考えた疑問について話し合う場としてシンポジウムを行うことで、考えたり話し合ったりする意欲を高めるきっかけを設けた。

表2 「プロットを立てて読む」学習過程

学習活動	
1	単元の目標と学習過程の確認 ・作品を読み取るためにプロットを立てること、それについて読み取ることとそれについて話し合うことを通して、作品の主題を捉える。 ・グループで話し合ったことについて語ることを目指す。
2	その1「百科事典少女」 ・プロットとは？ ・プロットを吟味する
3	・学級で考えた疑問について読み取る ・読み取った考えを共有（ジャムボード） ・作品の主題に迫ることのできる疑問点であったかを振り返る
4	その2「故郷」 ・プロットを立てながら読む ・シンポジウムのテーマとなる疑問点を吟味する
5	シンポジウムのテーマについて作品分析 ・登場人物の人物を分析する ・登場人物の関係を分析する ・物語の時代背景を把握する ・作者について調べる
6	シンポジウム① ・なぜ私は「名残惜しい気はしない」のか。 ・私、ルントー、楊おばさんが変わってしまったのはなぜか。 ・故郷が変わってしまったのはなぜか。
7	シンポジウム②（2学級合同） ・作品を通して魯迅が訴えていることは何か。
8	自分の考えをまとめよう ・グループでの分析やシンポジウムを通して、自分の考えを文章化する。 ・全員の意見をプリントで共有する。

その1では、物語についての疑問点をとにかくた

くさん挙げていくことを練習として行った。そこからどんな問いが物語の主題に近づける「良い問い」なのかを考えていった。「1問1答にならないもので、人物像について広く深く考えられそうな問い」「一部分を読んでわかるものではなく、作品全体に関わる問い」をグループごとに吟味し、提案をさせた。4学級で差異はあったが、登場人物の心情や関係性に迫る問いを立てることができた。

その2では、皆で考えたい問いを決めて、それをテーマにしたシンポジウムを2回行った。シンポジウムは各学級共通のテーマ「魯迅が作品を通して訴えていること」を提示し、そのテーマにつながるシンポジウム①の問いを各学級で設定した。それは「なぜ私・ルントー・楊おばさんは変わってしまったのか」「私が名残惜しい気がしなかったのはなぜか」といったものだった。その1で考えた問いが、作品の一部にしか関わらないものだったり、テキストにはない事柄について、想像でしか判断できなかったりするものは適していないと学んだことが活かされていた。いくつものプロットを立てて、その共通点などをまとめて作品全体に関わる効果的な問いを立てることもできていた。

シンポジストとして考えを「語る」ために、各グループが真剣に作品に向き合って話し合っていた。今までの学習を活かし、人物を多角的に捉え、物語の背景を考慮し、作者についての情報もふまえ、読み取ったことを話し合う様子は大変楽しそうであった。「しっかりと語りたい」という思いが作品を深く読もうという意欲を高めていた。

シンポジウムは、互いがどのように作品を読み取ったのかを伝えて比較し、共通点があることに安心しながらも違う見方や考え方を楽しむ時間になっていたようだ。2回目のシンポジウムは2学級合同で行った。単学級の時よりも生徒が熱心に発言を聞き考える姿があり、「自分も何か発言したい」と思いながら必死に議論を把握しようとしていた。

2回のシンポジウムを終えて、「『故郷』で魯迅が訴えていること」を各自で文章化した。教師の発問が無い授業で、作者の思いをしっかりと捉えることができており大変うれしく感じた。

今までの学習を含めての生徒の振り返りから、成果と課題を挙げてまとめたい。

4. 成果と課題

4.1. 学習後の生徒の振り返りより

○まず、読んで思ったことは「わからん」の一言だった。グループの人と話し合っただけ教科書に付箋を貼って、それぞれの人物像をつかもうと頑張った。抽象的な表現もたくさんあってグループですごく悩んだ。家に帰ってからも考えてみたり…と今までで一番考えたような気がする。丸い月や空などが何度か出てきて、「この月は、前のとは違うのではないか」などのやりとりができた。今回の「故郷」はすごく内容がわかりづらかったが、たくさんグループで話し合うことができたと思う。鲁迅が伝えたいのは「自分を抑えるぐらいなら『嫌だ』と声をあげていけ。皆が嫌だと声を上げて、少しでもいいから今を変えようと行動すれば叶うだろうに。」ということだと思う。

→物語の魅力にはまることでグループ学習が活発に行われた。自宅でもオンラインで話し合っているグループもあった。

○長い時間グループでこの作品について考えたけど、シンポジウムではそれだけ考えても思いつかなかったことや視点があって、シンポジウムの大切さを感じました。シンポジストをやってみて緊張したし、難しかったけど自分の語る力もついたと思うので、いい経験になりました。

→熱心に話し合っただけまとめた考えを伝えたいという思いがあったからこそ、シンポジストの発言には説得力があった。自分が「語る」ことができた実感を持てた。

○グループでの話し合いはやはり面白いです。生き詰まったときにふと出る新しい考えは一人でしていると出ないものですから。また、物語に隠された言葉の意味を考えるのも大切だと思いました。

→つづやける関係性ができている。

○人物分析を深めていくとわかったこともありながら、さらに疑問が出てわからなくなることもありました。でもシンポジウムで、他のグループの考えを聞くことで自分なりに納得できました。シンポジウムでは視点が違うグループもありましたが、話し合うことで結論が同じようになっていて面白いなと思いました。

→主題に迫る結論がシンポジウムで発言され、各クラスで主体的な読み取りが出来ていた。

○シンポジウムを通して、自分以外のグループの意見を聞いて新しい視点を持つことの大切さを学びました。また、一つの視点到底まで続けるのをたまにはやめる必要もあるなと感じました。→他者の意見を聞くことで自己調整力・メタ認知力が向上している。

○グループで人物の分担をしたので、分析に時間がたくさんとれた。でも、登場人物の立場で気持ちを考えるのが難しかった。シンポジストとしては、質問を受けながらもっと別の視点で考えることも大切だと感じた。

→より多様な視点が必要である。そのために多くの作品や人と関わることや多様な経験をすることが必要であろう。

○細かく人物分析をしたり、プロットを立てたりすることで物語の読み方や視点が広がったように感じた。普段の読書ではこんなに時間をかけて分析は出来ないけど、ひとつの文でもいろいろな解釈ができておもしろいなと思いました。メロスの時もそうだったが、読み込むうちに見方が変わって読書の楽しさを再確認できた。まとまった時間ができた時に今回のようなことをまたしてみようと思う。

→物語に限らず、漫画やアニメでもストーリーのあるものを楽しもうとする視点や主体的に読む姿勢が育った。

○はじめは意味がわからなかったけど、繰り返しグループ内で話し合ったり、他グループの意見を聞いたりするうちに何となくわかってきたのはうれしかった。コーディネーターをしてみて、シンポジストが話していても「次をどう進めようか」と考えてしまい、メモをとるどころじゃなくて、その上発言が出なくてとても難しかった。

→シンポジウムのような大人数の中での話し合いを重ねることで効果的な発問やメモの取り方といった話し合いのスキルを上げていく必要がある。

参考文献

- ・中学校学習指導要領(平成 29 年告示)文部科学省
- ・大村はま 国語教室第 10 巻 筑摩書房
- ・藤原一恵(2020) 主体的な学びのためのやりくり「話したい・書きたい」と思わせる仕掛け 鳥取大学附属中学校研究紀要 51